

クマ送り場をのこしたニクブンの 青年たちについての覚え書き

—北海道知床半島のギリヤークの遺構—

093 北海道網走市南6条東6丁目

畠山三郎太

はじめに

本誌の第4集で金盛典夫氏は知床半島のクマ送り場について述べられ、また第5集でも北大の山田氏は、これをオロッコの遺跡^①とされる報文を書かれているが、この遺構の存在は研究者の報告以前に、地元の人たちには〈骨塚〉とよんで恐れかきこみ、近寄らないようにしていたものらしい。私も昭和36年7月に、知床岬遺跡調査隊の一員として参加したとき、はじめてこのクマ送り場をみたが、それ以前に、すでに帯広畜産大学の学術調査団がこの遺構に接しており、記録映画に収めていたことを後で知った。私は、当時所属していた学会の機関誌に、その結果を2回にわたって報告したが、注目されることもなく、また、ほとんど地元の人たちにも知られることなしに、とうとう20余年の歳月が過ぎてしまった。その後オホーツク文化の担い手は誰であったか、をめぐり北海道新聞紙上で2ヶ月にわたる論争が、加藤晋平、菊池俊彦、大井晴男、石附喜三男の各氏によって展開され、大いに北海道と樺太あるいは沿海州地方との関係に注目が集められたのは、昭和54年のことであった。この論争とクマ送り場の遺構は、直接むすびつくものではないが、樺太のオタスの杜（もり）に住んでいたニクブンの青年たちが、北海道の知床半島の先端附近まで狩猟に来ていたという事実は、古代文化の南下の事実と思いをあわせて、何となく私の興味をひくものがあった。

また、この遺構をはじめて学会に報告した者の責任として、地元の人たちに正確な情報を還元し、採集した資料を地域の博物館に寄贈することが研究者の義務であると感じ、本稿をまとめることとした次第である。

1 クマ送り場の遺構

遺構のある場所は、当時は無名の湾であったので、調査隊では仮称として、ワシが岩上にとまっている様な形の岩が湾の入口に立っていたところから、「ワシ岩湾」と呼んだ。同名の岩がアブラコ湾の東側にもあったということは、当時は知らなかったのである。（写真1参照）遺構の構造は金盛氏がすでに述べられた通りで、材料はイチイ（オンコ）を利用し、これを長さ90cmから120cmほどの長さに切って、井げたに組んだものである。組手の加工には、ノコや鉋のようなよく切れる刃物が使われており、海岸段丘崖の中腹に突出した露岩の下にセットされていた。一見して、アイヌのエベレセツに類似したものであることは判ったが、北海道アイヌのものとは型式がちがう様に思われ、当時学芸大学の教授であられた河野広道博士に内報して、その所見を乞うた処、①樺太アイ



写真1. ワシ岩と岩陰の遠望



写真2. クマ送り場を残したニクブンの青年たち
(後列右は服部健博士)

ヌのイソチェイに似ている ②ヌササンを欠いた例は、北海道の例としては聞いたことがない ③アイヌの古式によるものではない。まだ未知の稀な例であるから、樺太アイヌとの関連を洗う必要がある、との要旨の手紙をいただいた。(昭和36年8月22日付、河野広道博士書翰) 私は、このクマ送り場が北海道内では珍しい樺太のものらしい事に内心はあやしみ、半分は喜んで、当時、オタスから網走に引き揚げてきていたニクブン(ギリヤーク)のシャーマンである中村千代さんの自宅を訪ねたのであった。

中村千代さんは、当時まだ元気で、駒場12番地の市営住宅で1人暮らしをしていた。早速知床の遺構について尋ねてみると、千代さんは言下に、それはアイヌのものではなく、ニクブン(ギリヤーク)のものであると説明し、しかも、それを作った青年の名前も知っている上に、その青年たちから肉をわけてもらって食べたというのであった。

ニクブンのクマの骨倉には、頭倉と骨倉とがあり、頭倉は「ジョクルシニョ」と聞こえ骨倉は「ンガハ」と言っているように私には聞こえた。知床では、これがひとつになっていたのである。いわば、伝統的な形式から変化した簡略形式と考えてよいであろう。(●印は強く発声する部分)

中村さんは、さらに興味ある話を教えてくれた。

ニクブンでは、クマの肉を食べるときに、男女の性差で禁忌があり、女は決してクマの頭の肉は食べることができないとされていた。⁽³⁾しかし、中村さんは「うしろこうべの肉は女の髪だから、女も食べてよい」と呪文し、「ほったの肉は女の耳飾りだから女も食べてよい」と、呪文をととなえ、神のゆるしを得て食べたというのであった。

この中村千代さんの証言で、サハリンのニクブン青年の名前を知った私は、更にそれをギリヤーク研究の第一人者と認められていた服部健博士に通報して、その意見を乞うたのであったが、今度は意外にも服部博士から、このクマ送り場を残したニクブン青年たちの写真があるという情報を得たのであった。それは、昭和16年、まだ太平洋戦争が始まる前に、網走町で撮ったものであるという。

2. ニクブンの青年たち

服部博士から送られてきた一枚の写真がここに掲げたものである(写真2参照)。後列の右のネクタイ姿の紳士が、当時の服部博士で、その左隣りは当時27才のクムン(日本名・上村幸二郎氏)、前列の左はゲシュクン(北村儀助氏25才)、右が上村春吉氏で当時28才であったとのことである。この上村春吉氏の妹が北村儀助氏の夫人になっている

ので、両者は義兄弟であった。服部博士の手紙によれば、上村春吉氏と幸二郎氏は、昭和20年の敗戦時に、ソ連軍に連行されて、今は行方不明という。もし健在ならば、年長の春吉氏は多分72才になられている筈であろう。写真をとったという網走町の木村写真館は今も営業している。

3. クマの遺骨について

遺構内のクマの骨は、骨片を一括して網走郷土博物館が保存し、頭骨は復元が可能と判断して私が保管した。採集当時、歯牙の1本も見落さないように、構内は地山の土まで精査したが、ついに歯牙は1本も見つけられなかった。また、頭蓋骨に付随した筈の下顎骨も存在しなかった。

私が担当した頭蓋骨の計測値は、すでに報告⁽⁴⁾してあるが、最大頭蓋長は388mmで中形のヒグマに属する。ヒグマ頭骨には性的二型があることが知られているが、この頭骨は基底長(Basal length)が337mmであること、矢状稜(Sagittal crest)の発達が良いことから雄と判断される。また、頭骨は3つに割れていたが、接合してみると頭部の左側が破損して孔になっていることが判明した。千歳市の美笛で、同様なヒグマの頭骨を検査された道開拓記念館の門崎允昭農学博士の報告⁽⁵⁾によると、性徴指標部位が残存していた12例のうち、♂5個体は全例が頭の左側に破孔が人為的に作られ、また♀7個体は全例、右側に破孔が認められて、他の性徴指標と完全に一致した由である。知床半島のギリヤーク遺構から採集したこの雄のヒグマ頭骨も左側に破孔があり、ヒグマの頭骨に加えられた儀礼が、近年まで厳密に守られていたことを示すものとして興味深かい。

おわりに

知床岬で、ニクブンの骨倉に出合ってから、はや24年の歳月が流れた。永らく手許において研究の進展をねがってきたが、力の不足からやっと今日に至って責を果すことができた様に思う。サハリンのオタスと北海道の知床岬とは、はるか700km以上をへだてているが、ニクブンやウイльтаなどのサハリン住民たちにとっては、狩猟のテリトリー内の距離であったように思われる。オホーツク海は、昔は、もっともっと自由に往来できたサハリンと北海道を結ぶ経済と文化の海上ロードであ

った。

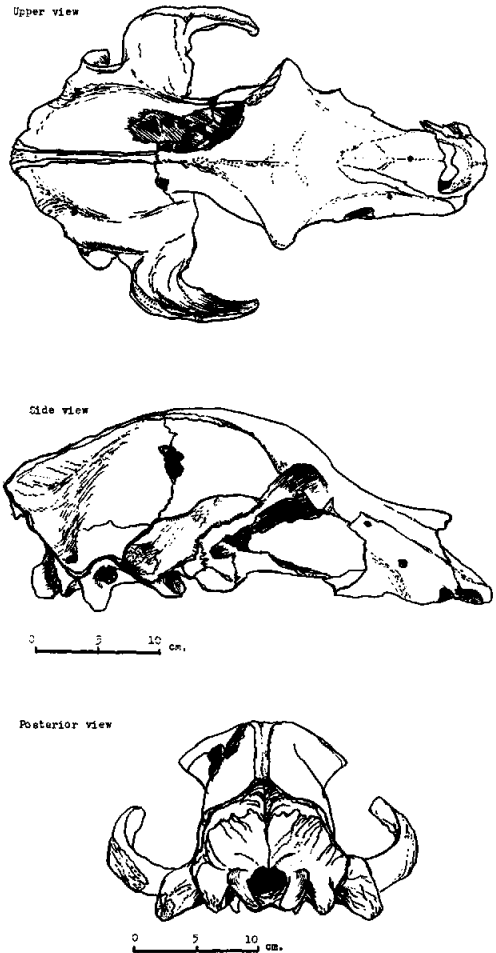


図1. 遺構から採集されたヒグマ頭骨

文 献

- (1) 山田俊幸：カヌーによる知床半島北岸遺跡調査、知床博物館研究報告、第5集：1983。
金盛典夫：知床岬およびオケッチウシ地区の遺跡、同、第4集、1982。
- (2) 畠山三郎太：北海道知床半島のクマ送り場遺跡、民族学研究、Vol.26、No.2、1962。
畠山三郎太：知床岬の骨倉、民族学研究、Vol.28、No.2、1964。
- (3) 服部 健：ギリヤーク、楡書房、1956。
- (4) 畠山三郎太：知床岬のクマ送り場遺構について、河野広道博士没後20年記念論文集、昭和59年7月、北海道出版企画センター。
- (5) 門崎允昭：動物遺存体について、千歳市美笛における埋蔵文化財分布調査、千歳市文化財調査報告X、1984、千歳市教育委員会。